

金属を通して歴史を観る

32. 三角縁神獣鏡は中国鏡か(1)

新井 宏

韓国国立慶尚大学招聘教授

盛り上がる論争の条件

アマチュアを熱中させる歴史論争の条件はテーマがわかりやすいことである。かつての法隆寺再建・非再建論争がそうであった。

日本書紀に法隆寺は西暦670年に全焼したと書かれているにもかかわらず建築様式から見ると、とても焼失したとは信じられず、明治38年から33年間にもわたって「燃えた」「いや燃えなかった」とアマチュアも加わり大論争が繰り広げられた。結局は昭和14年の若草伽藍発掘によって「再建論」に一応軍杯が上がったが、いまだに姿を変えては新しい「非再建論」が提出され続けている。

もっともそんな古い例を出さなくとも「邪馬台国は大和か北九州か」の論争もアマチュアには大変人気がある。プロの間では大和説が圧倒的であるが、アマチュアでは逆に北九州説が優勢で、国民投票をすればきっと北九州説が勝であろう。

このようにテーマがわかりやすく、しかも自論に有利なデータだけを対象にして議論を進めることが許される分野ではアマチュアの声が大きくなる。それに対してプロは、つまらぬ怪我をしないようにと声をひそめて話をする。

ところで三角縁神獣鏡をめぐる話題もアマチュアを熱中させる条件を備えている。すなわち「三角縁神獣鏡は卑弥呼の鏡か」あるいは「三角縁神獣鏡は魏鏡か国産鏡か」というテーマは誰にでもわかるほど簡単なものなので、誰でもちょっと意見を言ってみたくなる。しかし簡単なテーマほど論争の決着がつきにくいのも世の中の常である。テーマが簡単なほど議論が複雑化するのは避けがたいことなのだ。

三角縁神獣鏡は国産か

前置きはこのくらいにして、まず三角縁神獣鏡について

簡単に紹介しよう。

倭の女王卑弥呼が大夫難升米を帯方郡經由で魏の都の洛陽に派遣したのが景初3年(239年)である。そのとき下賜された「好物」の中に「銅鏡百枚」があった。それが富岡謙蔵氏によって初めて三角縁神獣鏡であると比定されたのはもう80年も前の1920年のことである。論拠は三角縁神獣鏡の銘文のなかに「銅出徐州師出洛陽」とあり、徐州と洛陽の地名と師という文字の使用は魏代に限定できると考証したからであった。

その後、1951年には大阪の和泉黄金塚古墳で「景初三年」銘の三角縁神獣鏡によく似た画文帯神獣鏡が、また1953年には京都の椿井大塚山古墳から33面もの三角縁神獣鏡が出土し、これらの背景のもとで、小林行雄氏は1961年に、三角縁神獣鏡「同范鏡」の分布共有関係から、日本の古代国家の支配構造について壮大な構想を『古墳時代の研究』として纏め上げ、日本古代国家像に対して極めて大きな影響を与えた。しかもその後、三角縁神獣鏡の中には景初3年(239年)あるいは正始元年(240年)という魏の年号をもつものも発見され、三角縁神獣鏡が卑弥呼の鏡として完全に定説化されたかのような状況さえ出現した。

しかし三角縁神獣鏡を魏鏡とするには不思議なことがいくつもあった。たとえば中国鏡に較べると異常に大形化していて鏡面が凸型となり実用の鏡としての意味をもたなくなっていることや紐孔に中子砂が詰まったままのもの、あるいはバリの手直しのないものがあること、それから中国にはほとんどない同型鏡が極めて多いことなどがあるが、何といたってもその最大のもは、日本では類型を合わせると500面にも達しているのに、中国では未だ1面も見つかっていないことである。

三角縁神獣鏡が中国で見つかっていないことは、もう40も前に森浩一氏が指摘し、それをもとに国産説を唱えたが考古学界は冷淡であった。その後も網干善教氏が「踏み返し鏡」の存在を実証し、アマチュア研究家の

奥野正男氏が詳細な鏡の形式変化をもとに国産説を提示しても考古学界は相変わらずであった。

状況が変わったのは1982年中国の有力な考古学者王仲殊氏が、中国呉の渡来工人による日本産説を発表した頃からである。論拠は三角縁神獣鏡の源流となっている神獣鏡や画像鏡は江南の呉の領域で発達したものであり、華北の魏には類似鏡が見あたらないということであった。

王仲殊氏の学説については、さすがに無視されることはなく、従来学説を支持する立場の学者から、系譜論や銘文解釈をめぐって個々に反論がおこなわれた。それによって三角縁神獣鏡の系譜の研究が急速に深められてきている。その結果、王仲殊学説に反対する立場での研究のおおよその帰着点は、三角縁神獣鏡の生産地は必ずしも魏の都洛陽近辺というわけではなく、魏の周辺地域である渤海湾岸地域や朝鮮半島の楽浪郡とする所にあるようだ。

その点で特に注目されるのが、福永伸哉氏の研究である。それはわずかな例外を除いて三角縁神獣鏡は扁平な長方形の紐孔をもっており、そのような長方形紐孔をもつ鏡は中国の東北部すなわち渤海湾岸地域でのみ発見されていることから、「公孫氏の勢力下で銅鏡製作を行っていた工人集団が、公孫氏滅亡後、魏によって再編成され、卑弥呼下賜用の鏡製作にあたった」と推定している。ちなみに公孫氏が滅亡したのは卑弥呼が魏に難升米を派遣する前年の景初2年(238年)である。公孫氏は魏と対立していて呉とは親しかったので呉鏡の影響を大きく受けたのだと考えると妙に納得が行くような気がする。

もうひとつの有力な考え方は西川寿勝氏の楽浪郡説である。氏は10年以上にもわたって中国出土の銅鏡の拓本や写真をデータ化し、それらと日本出土の舶載鏡を比較して舶載鏡の製作地推定を進めていた。その結果は、日本における舶載鏡の大部分が中国本土出土鏡とあまり共通する要素がなく、むしろ朝鮮半島の楽浪郡出土のものに共通性が高いとするもので、三角縁神獣鏡も楽浪郡製の可能性が高いと位置づけている。ただし、氏は三角縁神獣鏡は卑弥呼の鏡ではなく、卑弥呼には宝飾鏡クラスの高級な鏡が下賜されたはずだと推論している。

その他にも、車崎正彦氏が最近、舶載三角縁神獣鏡と仿製三角縁神獣鏡の様式変化が連続的であり、明確に区分できないことなどを主な理由として、仿製三角縁

神獣鏡も中国で製作されたものだという斬新な学説を提示して大きな話題になっている。

このような状況であるから、他分野の学者からの新視点からの提案にも注目すべきものが出ている。それは中国語音便学者の森博達氏によるもので、三角縁神獣鏡にある銘文を韻律から見ると全く平仄が合わず、しかも口語語彙を用いているところもあり、魏の下賜鏡とはとても考えられないというものである。

以上のような論議はアマチュアを惹きつけるに十分な要素をもっていて、筆者も一度まとめた形で発言してみたいとかねがね思っていた。まだ十分に機会が熟しているわけではないが、三角縁神獣鏡の製作地問題について、「金属を通して」金属原料や製作方式の問題からアプローチしたらどうなるか論じてみたい。

実証性に欠ける論争

人気のある論争が一般的にそうであるように、三角縁神獣鏡論争も当事者の主張には極めて主観的な場合が多い。本来は考古学的な事実から検証すべき内容を、逆に前提条件として利用するような本末顛倒の議論が目立つのである。どんな点があるか列挙してみよう。

1. 三角縁神獣鏡には同型鏡が多数あるが、それは鑄造技術的に見て同范で製作することは困難であり、ロストワックス法あるいは踏み返し法などによって原型あるいは原鏡から複製されたものが大多数だと考えなければならない。したがって複製が可能であるならば、複製鏡の製作時期や製作場所は、原鏡あるいは原型と同じ時期、同じ場所であったという保証はない。ところが、精緻な様式変遷を研究しているグループは前提条件さえ置くことなく、複製時期や複製場所を原鏡のそれと同一と考えて議論している。

2. 三角縁神獣鏡を中国製とする議論は、無意識のうちに、当時の日本の工人が「漢字」を理解し得なかったことを前提としている。もちろんその可能性があることは認めるが、「漢字を理解しなかった」という認識は、何らかの事実によって逆に検証されるべき性質のものであって、「漢字を知らなかったはずだ」という認識から議論するのは本末顛倒である。中国との交渉が一切なかったわけでもないのであるから、ある程度漢字の知識を有する工人いたとしても何ら不思議ではない。

3. 当時の日本の技術では精緻な文様の三角縁神獣鏡は作れなかったとする議論がある。しかしこれも

本末顛倒である。弥生時代後期の平原墳墓からは直径46.5センチの超大形仿製内行花文鏡が4組も出土しているし、また古墳時代初期の桜井市柳井茶白山古墳からも直径44.8センチの秀麗な仕上がりの仿製単頭双胴鏡怪獣鏡が出土している。中国鏡には20センチを超える例はほとんどないことからいえば、大型鏡の鑄造は日本の方がはるかに経験豊かで、技術的にも進んでいた可能性がむしろ高いのである。径が2倍以上あるということは重量は8倍以上あるということで、大型鏡の製作技術は小型鏡の延長線上にあるとは限らないのである。

すなわち、三角縁神獣鏡の製作地問題に関しては、複製をどこでおこなったかについての議論を除外しては全く成立しない。それは鏡の様式とは無関係であり、様式変遷の研究からは何の結論も得られないことなのである。しかも和泉黄金塚出土の景初3年銘画文帯神獣鏡と島根県神原神社古墳出土の景初3年銘三角縁神獣鏡の関係、あるいは奈良県鏡作神社の三神二獣鏡と愛知県東之宮古墳出土の三角縁神獣鏡の関係で知られているように、鏡の内区だけが同型の例もいくつもある。したがって、鏡の様式変化でさえ、部分的な複製を組合せ外区を付け加える等の方式を無視して議論するわけにはゆかないのである。したがってこの解明に当っては別のアプローチを必要とする。

鉛同位体比からのアプローチ

そのためには原鏡と複製鏡の識別を製作技術面から実証的におこなうことが望ましいことであるが、複製方法そのものについても、ロストワックス法を有力としながらも、いまだ同范鏡説を唱える学者から、砂型による踏み返し鏡説までなかなか意見が一致していない状況では、主観的な議論に流れやすく、多くを期待することができない。

次に有望なアプローチは鉛同位体比から原料問題を通じて製作地を識別しようとするものであるが、これも中国出土の中国鏡の鉛同位体比分析値がいまだ全く得られていないことが、大きな隘路となっている。しかし比較的客観的な議論がしやすい点の魅力がある。

鉛同位体比分析を利用して、青銅器原料の原産地を推定しようとする研究は既に数多くある。たとえば、弥生前期の多鈕細文鏡は朝鮮半島産の鉛、前漢鏡や弥生時代の仿製鏡（中国鏡に倣って日本で製作された鏡）は華北産の鉛、古墳時代の後漢式鏡や仿製鏡、倭鏡は

華南産の鉛などと判定している（これらの判定の問題点については私の論文「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐる」『考古学雑誌』85-2, 2000で痛烈に批判している。その内容は本シリーズでも紹介したことがある）。

それにしても今ごろになって、中国出土の中国鏡の鉛同位体比分析が全くないとは初耳であろう。鉛同位体比に関する論文を読めば、そこには豊富に中国鏡の分析例が載せられているからである。

じつはこれらの分析資料はすべて日本出土の中国鏡の分析例なのである。しかも日本から出土している中国鏡には同型鏡が多数あり、厳密に言えば、それらが原鏡であるか、複製鏡であるかはわからないのである。したがって中国出土の中国鏡の分析値でない限り、その分析値に絶対的な信を置くわけにはゆかない。そうであるならばどのようにアプローチすべきであろうか。

以下は私の試論である。

鉛同位体比から見たマクロ認識

弥生時代末期から古墳時代にかけての舶載鏡には、草葉文鏡、星雲鏡、虺龍文鏡などのいわゆる前漢鏡のほか後漢式鏡として方格規矩鏡、内行花文鏡、獣帯鏡、画像鏡、盤龍鏡、画文帯神獣鏡、三角縁神獣鏡などがある。三角縁神獣鏡を除くといずれも中国で出土していて、様式的に見てこれらを中国鏡とするのには問題がない。しかし複製鏡が存在することを前提にすれば、その製作地を海外に限定するわけにはゆかない。

一方、これら中国鏡をまねてつくったいわゆる仿製鏡や日本独自に発達した倭鏡も数多くある。これらの多くは日本で作られたものであろうが、論理的にはb ; m日本製と断定することはできず、事実その一部については朝鮮半島でも発掘されている。

鉛同位体比による議論は、鏡の様式論に比較すればはるかに簡単なものではあるが、それでもこのように多少の予備知識は必要である。これからの議論の見通しをよくするために、極力前提条件を排除して現在までに得られている資料を紹介しよう。

グラフが多く出てくるが、要は4種類ある鉛同位体の原子比率について、縦軸に Pb^{208}/Pb^{206} 、横軸に Pb^{207}/Pb^{206} を採って示したものであり、原料源が同じ場合には図上で同じグループを形成する傾向があるということである。とりあえずそれ以上の深い理解は必要ではない。まず図1から図5を見てもらいたい。

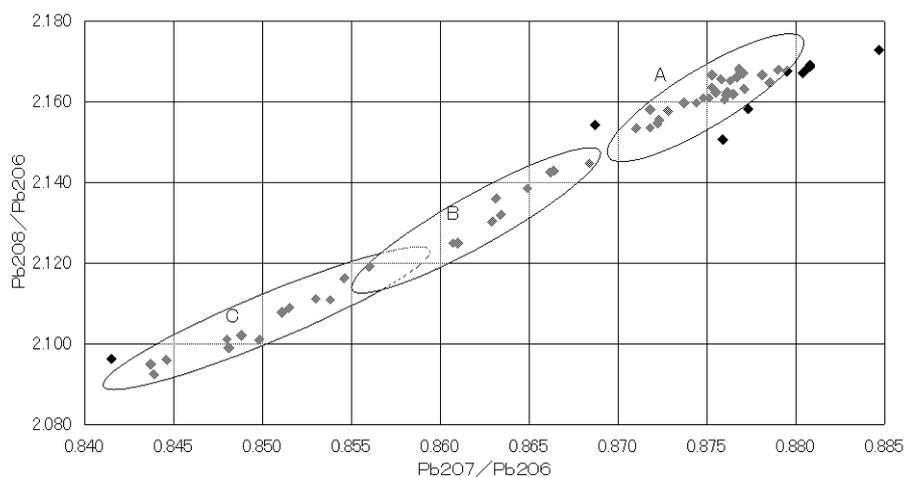


図1 弥生遺跡出土の舶載鏡 (漢鏡4期以降)

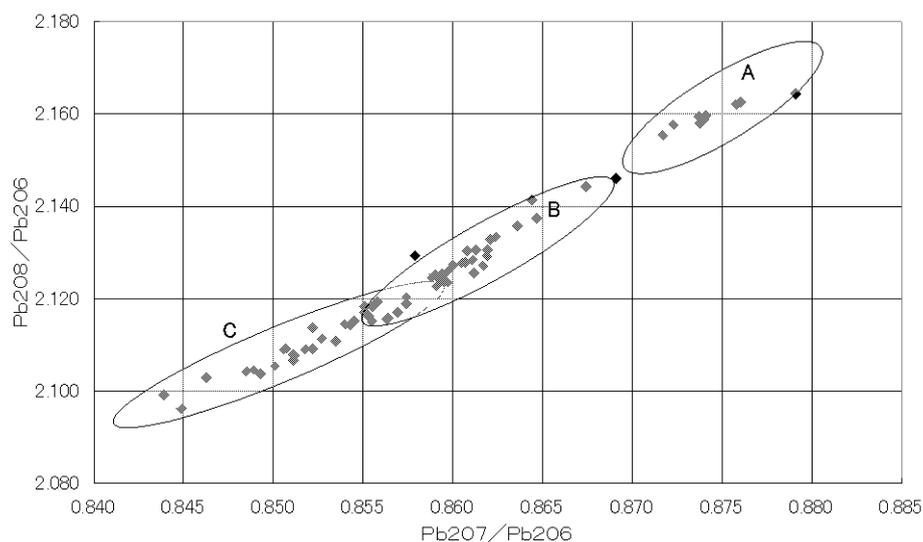
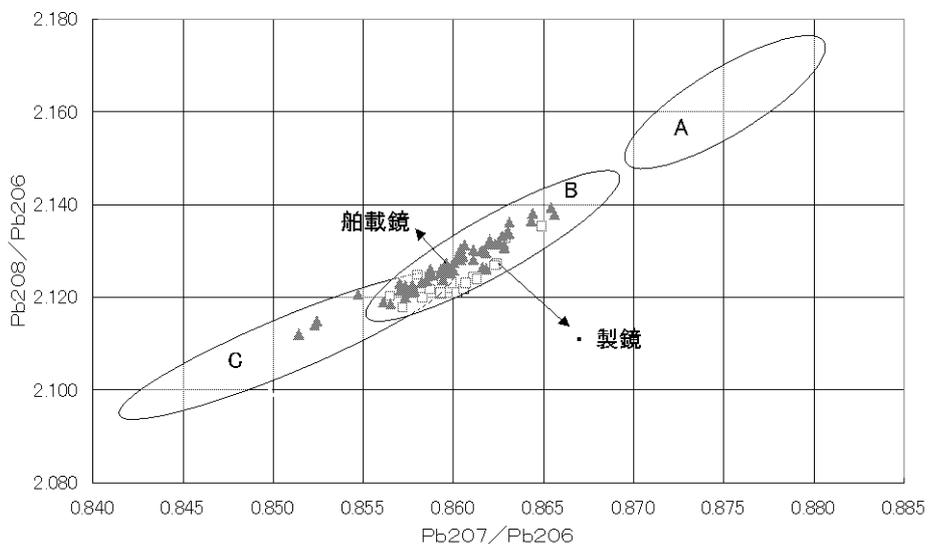


図2 古墳出土の舶載鏡 (漢鏡4期以降)



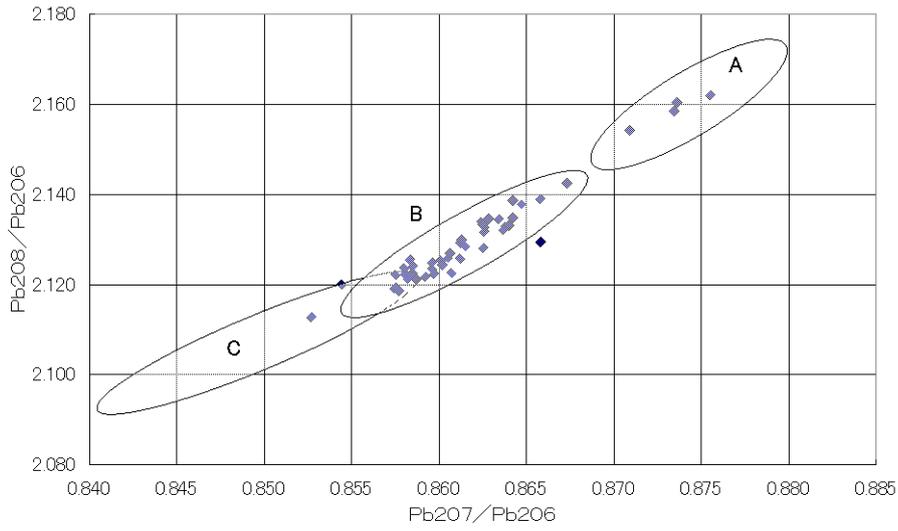


図4 仿製鏡と倭鏡

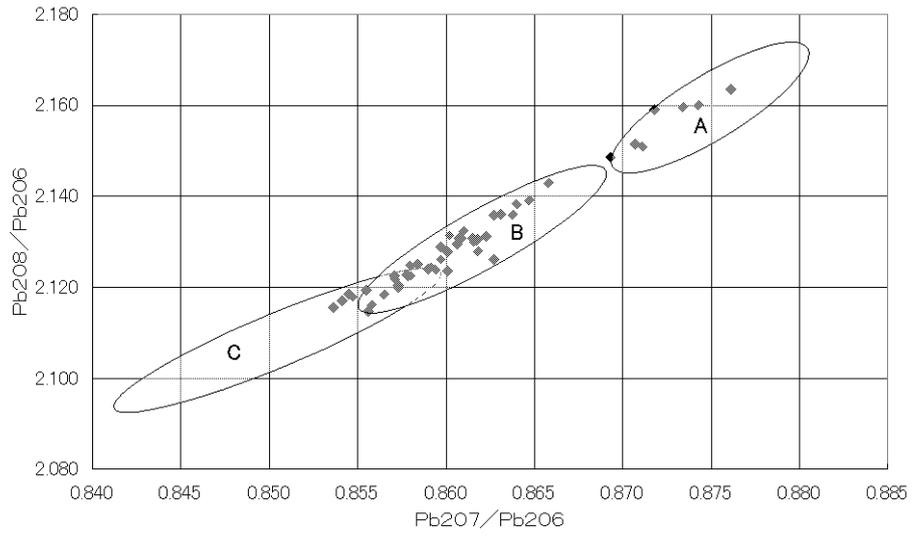
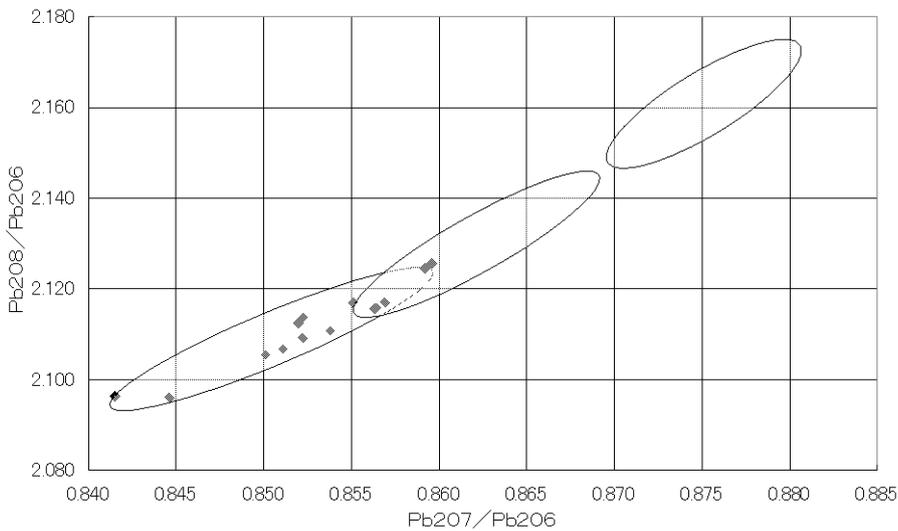


図5 古墳時代の銅鍍



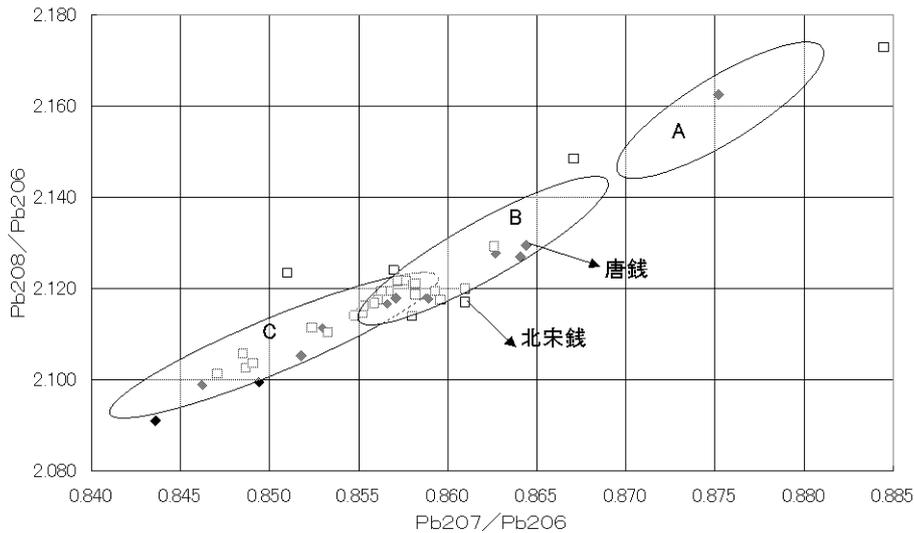


図7 唐銭・北宋銭

いずれの図にもA, B, Cの3つのグルーピングをおこなっているが、これはグラフを見やすくするのが主目的で、あくまで便宜的な区分である。図の順番に見てゆけば、おおよその理解ができるであろうが、要点を簡単に整理すると次のようになっている。

1. 弥生後期遺跡出土の舶載鏡はA領域を主体としてはいるが、C領域にもB領域にも多少の例はある。
2. 一方、古墳遺跡出土の舶載鏡はA領域が少なくなり、C領域とB領域が主体となる。
3. 問題の三角縁神獣鏡は大部分がB領域にある。
4. 仿製鏡と倭鏡もほとんどがB領域にある。
5. 古墳時代遺跡出土の銅鏝もほとんどがB領域にある。

すなわち、単純にいえば、舶載鏡の鉛同位体比はA領域からC領域までばらついているが、三角縁神獣鏡と国産青銅器のほとんどがB領域に納まっているということである。

このことから、直ちに三角縁神獣鏡が日本で作られたと結論できるわけではないが、のちに議論するように、

舶載鏡には日本で複製された場合もあり得るので、その点まで考慮すると真の舶載鏡と三角縁神獣鏡や仿製鏡との分布が大きく異なる可能性も十分にある。この点については、いまだ中国で出土した中国鏡の鉛同位体比分析事例が全くない現在、ひとつの可能性を示すにすぎないが、注視してゆく必要があるであろう。事実、同型鏡の存在が知られていない(すなわち日本での複製の可能性の低い) 双頭龍文鏡, 斜縁二神二獣鏡, 夔鳳鏡だけを対象とすると図6のように大部分がC領域に分布していて、B領域に入るものは少ない。もっとも時代は下るが図7に示すように、唐銭や北宋銭の鉛同位体比分析結果も、C領域を中心としてはいるが、B領域の事例がないわけではない。それに、古墳時代の青銅器原料も現状では国産とは考えられていないのであるから、議論は単純ではない。

ただし、このように鉛同位体比によるマクロな認識からいえば、三角縁神獣鏡の多くが国産であっても不思議ではない結果を示しているのである。